学 級 集 団 の 研 究

― 教師の指導態度と学級の集団構造特性 ―

田 中 康 雄

1. 問題および目的

塩田，田中（1971）は，学級の集団構造の特徴を記述するために，Flanders, N. A. の研究を参考にして，権威，目標指向，社会的接近の構造という3つの次元から，方法上の問題点を検討し，その有効性について一つの試みを報告した。

そして，今後の主要な問題点として，このようにして作成された測定方法（用具）を教育現場における実践的研究に適用してみるという点があげられた。そこで，本研究では，学級の集団構造の特徴に影響をおよぼしていると考えられる多くの変数のうちで，特に教師の行動変数，具体的には教師の指導態度をとりあげ，指導態度と教室内でなされる生徒との相互作用あるいは人間関係の所産である学級の集団構造との関係を調査的手法によって明らかにしようとするものである。

すなわち，教師の指導態度の型を，従来のこの領域に関する諸研究を参考にして，ここでは，集団中心，教師中心，生徒中心，教師および集団中心という4種の型に限定して（図1），その程度を量的に表現するために個々の教師それぞれについて指導態度を測定する一方で，あわせて，これら4種の指導態度のもとにある学級の集団構造（権威の構造，目標指向の構造，社会的接近の構造）および教師，学級の仲間，学校に対する態度に関して数種にわたって調査し，両者の関係を把握し，教育現場における実践的な研究を指向しようとした。

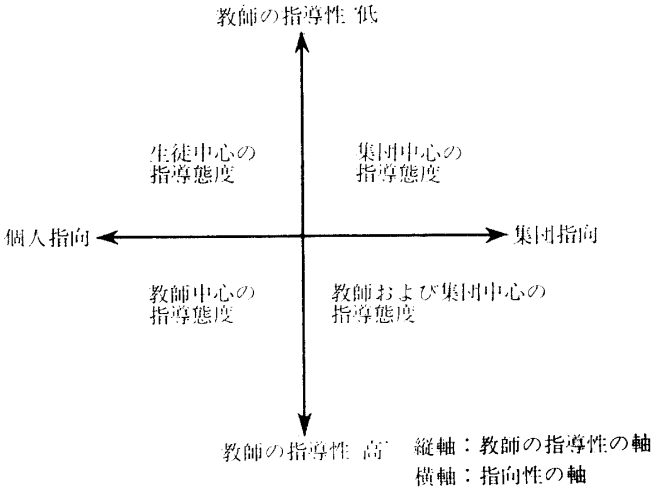

図1 教師の指導態度の4類型

そして，作業仮説としては，次の4つを設定した。これらの作業仮説は，Flanders, N. A. および塩田の研究から演繹されたものである。

作業仮説1　学級内には，教師を中心として種々のパターンをもった権威の構造が存在するが，教師の影響力（あるいは指導性）という観点から考えると，それが相対的に弱い（あるいは低い）と考えられる集団中心，生徒中心の指導態度のもとでは，教師の影響力が強い，あるいは教師の指導性が高い，教師中心，教師および集団中心の指導態度のもとにある学級と比較して権威の構造に関して，生徒各個人に対する選択が多くなされ，その結果，影響力の得点の平均値は高くなり，また数人の生徒に影響力が集中しない階層的に適度に分布した多層的な構造を示すであろう。そして，集団中心の指導態度のもとで高い平均値を示し，生徒中心の指導態度のもとでそれに次ぐ得点を示すであろう。

作業仮説2　学級内には，学習課題とその課題の達成に必要な手段の明確さと魅力に関して生徒の認知にもとづいた目標指向の構造があるが，集団中心，生徒中心の指導態度のもとでは，授業場面において生徒相互のコミュニケーションを通じて，課題の構造が明確化されるから，教授のすべてが教師によってすすめられる教師中心，教師および集団中心の指導態度のもとにある学級にくらべて，目標指向に関する指標において高い得点を示すであろう。そして，この傾向は，集団中心の指導態度のもとで顕著であろう。

作業仮説3　学級内には，友人関係などの生徒相互間の社会的相互作用の機会を示す社会的接近の構造があるが，集団中心，生徒中心の指導態度のもとでは，他の2つの指導態度のものと比較して，生徒の社会的相互作用の機会が多いので，生徒相互の選択が多くなされ，その結果，社会的接近の得点が高くなった特徴的な構造を示すであろう。そして，集団中心の指導態度のもとで特徴的な結果が得られるであろう。

作業仮説4　対仲間，対学校，対教師態度といった態度的側面に関する指標についても各指導態度類型によって，その特徴が認められ全体として作業仮説1～作業仮説3を支持する方向の積極的な示唆が得られるであろう。

Ⅱ　方法および手続き

資料の集め方としては，まず典型的な指導態度を示している小学校教師を選び出し（調査1，2による）次に，その教師が担任している学級に出かけて，生徒を対象にして調査する（調査3による）というやり方をとった。

調査1（教師の指導態度を測定するための質問項目の選択および検討）

(1) 質問項目の収集および質問紙の作成――教師の指導態度について，それが示されるのに典型的であると思われる場面（授業中，学級会）を選択し，そこからできるだけ包括的にして適切な質問項目を収集し44項目からなる質問紙を作成した。内訳は，教師の指導性（高，低）指向性（個人，集団指向）に関するもの22項目づつである。

(2) 調査の実施――調査対象は，教師経験年数が5～6年の現職の小学校教師64名とした。指導の理想像，現実像の2点に関して44項目ついて自己評定させた。（5段階評定）

(3) 項目分析――選択肢に与える得点は，回答の強度に従って順に5点から1点を与えた。そして回答の度数分布，全項目の積率相関係数の算出，完全セントロイド法による因子分析を行ない以下の基準に従って項目を選択した。①ここでは，因子抽出したうちで，第4因子までを問題として（第4因子までで全体の89％をカバーしている。）因子負荷量の絶対値が，.300以上であること。そして因子負荷量に関して，どの因子に負荷量が高いかという点からパターン分類をした。②回答の偏りについて，回答を3件法に集計しなおして「ハイ」と「イイエ」の反応の比が1：4または4：1以下であること。③他の項目との相関が，.300以上であること，さらにワーディングの点で若干の修正を加えた。

そして，最終的には，28項目からなる教師指導態度測定質問紙が作成された。内訳は，教師の指導性，指向性に関するもの14項目づつである。

調査2（教師の指導態度の分類）

(1) 調査の実施――調査1で検討を加えた質問紙を使用して，調査1を回答したと同一の教師49名を対象とした。（調査1の1ケ月後に実施した。）

(2) 教師の選出――この調査2にもとづいて典型的な指導態度を示している教師を，各指導態度とも4名づつ（低学年2名，高学年2名）選出した。

調査3（学級の集団構造の測定）

(1) 調査の実施――使用された質問紙は，塩田，田中（1971）の研究で用いられた質問紙（中学生用）を参考にして，小学生用に書き改められたものである。

Ⅲ　結　果

作業仮説1の検証については，低学年においては何ら有意差は認められず，ほぼ同一の学級集団レベルにあるものと予想された。高学年においては，作業仮説を強く支持する結果が得られた。すなわち，集団中心，生徒中心の指導態度のもとで高い得点を示していた。

作業仮説2の検証については，低学年においては，集団中心の指導態度のもとで，他の指導態度にくらべ，得点が高く，目標指向性の高いことが示され，この結果は作業仮説を支持している。高学年においては，教師および集団中心の指導態度のもとで得点が高かった。また，得点について低学年と高学年とを比較してみると低学年の方が得点の高いことが認められた。

作業仮説3の検証については，低学年においては，生徒中心の指導態度のもとで得点が高く，高学年においては，生徒中心，集団中心の指導態度の順に得点は高くなり，これらの結果は作業仮説を支持するものである。

作業仮説4の検証については，対仲間態度に関しては，低，高学年を通じて，集団中心の指導態度のもとで得点の高いことが示され，作業仮説を支持する結果が得られた。また，対学校態度に関しては，低学年では，集団中心の指導態度のもとで得点の高いことが示され作業仮説を支持しているが，高学年では有意差としては認められなかった。対教師態度に関しては，低学年においては，集団中心の指導態度のもとで得点が高く，生徒中心の指導態度のもとで得点がそれに次いで高いことが示され，高学年では，生徒中心の指導態度のもとで得点が高かった。これらの結果から，作業仮説4は，ほぼ支持されたと考えられる。

また上記の作業仮説の検証とともに，教師の指導態度の理想像と現実像，各構造の相関関係，生徒による対教師認知などの点についても若干の考察を加えた。

すなわち，教師の指導態度の理想像と現実像に関しては，各教師についてDスコアを求め検討を加えたところ，多くの教師がDスコアが4～5の値の範囲にあることが示され，水原ら（1963）の結果とかなり一致した結果が得られたことが指摘できる。そして，各構造の相関関係については，権威の構造と社会接近の構造との相関が高いこと以外には全般に相関は低いこと，またこれを妥当性という観点から，対仲間，対学校，対教師態度と

の相関値を求めてみると，比較的高い正の相関値が求められ，測定が妥当なものであると解釈された。また，生徒による対教師認知に関しては，教師自身の評定によるものと生徒の認知した教師の指導態度とは必ずしも一致していなかったが，測定法上の問題も指摘でき，この点に深く触れることができず，特にこの点に関しては，今後の重要な課題として残された。

さらに，討論では，教師の指導態度，作業仮説，構造の望ましさの3点について，本研究の問題点のいくつかを指摘した。